

論文要旨

『絨毯の下絵—十九世紀アメリカ小説のホモエロティックな欲望』

本合 陽

2012年12月31日出版

東京女子大学学会／研究社

作家が小説を書く際、自分の中の何かを解放するために作品を書く欲望と、自分の中の何かを隠蔽するために書く欲望が存在するのではないか。その問題設定はアメリカ文学という、近代を出発点にする国を背景に持つ作家を考える際に有効ではないか。十九世紀から二十世紀にかけての時代は、セクシュアリティという概念が形成されつつある時代であった。作者にとってセクシュアリティに関わる、もしくはつながる欲望を描くこと自体が隠蔽と解放という二つのベクトルの綱引きである可能性がある。その前提に立ち、ホモエロティックな欲望を描こうとする、もしくは描いていると思われる作品を考えるとき、ホモエロティックな欲望を作者はどのように描くのか、ホモエロティックな欲望と作者はどのように向き合うのか。

こういった問題を十全に論じたアメリカ文学論は日本ではまだ見当たらないと思われる。本論文が目的とするのはこの問題を考察し、個々のテキストがこういった問題とどのように向き合っているかを解明することである。すなわち、テキストに内在するホモエロティックな欲望をめぐる隠蔽と解放のドラマを読み解いていくことが本論文の目的なのである。そのためには、作者が残した作品というテキストと格闘し、向き合うことから出発する必要がある。従って本論文の各章は、多くは一人の作家の一つの作品論という形式をとった。しかしそこにはインターテクスチュアルな関係が暗黙の前提となる。本論文のこういった主題を表すメタファーとして、謎の解明を読者に迫るかのような作品をいくつも執筆しているヘンリー・ジェイムズの、「絨毯の下絵」という作品のタイトルを用いることにした。

作者が紡ぎ出す言葉は読者の心に一つの世界を作り出す。作品と読者の共同行為は、作者と読者の共犯関係とも言うるだろうが、作者によって発せられる言葉は作品となり、読まれるテキストとなる。読者は自分が身を置くディスコースを前提にテキストを解釈し心に作品の世界を創り出す。文学作品という、ある種の権威を持ったテキストが発する「呼びかけ」に応じて、読者が想定するディスコースを利用し、テキストは作者が想定するイデオロギー的な位置に読者を置く。作者とテキスト、そして読者の関係を論じる本論文のこのようなスタイルを、ミシェル・フーコーやジュディス・バトラーを援用し、序論の前半で理論化を行った。

序論の後半では論じる作家たちが共有するディスコースを確認した。十九世紀の後半はジェンダーおよびセクシュアリティの概念が発達する時代である。そういった時

代であるからこそ、ホモエロティックな欲望を描く欲望を持つ作家が一方にあり、自分の中に潜むホモエロティックな欲望と格闘する作家が一方にいる。結婚が規範となり、マンフッドの概念と強制的異性愛が形成されていく時代背景を概観した。

本論は二部構成になっている。第一部は四章構成で、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて、結婚をめぐるディスコースが絨毯の表に見える模様であるとすれば、作品の間のインターテクスチュアルな関係を視野に入れて分析することにより「絨毯の下絵」であるホモエロティックな欲望が見えてくることを、三人の小説家のテキストを分析し論じている。第二部では、ホモエロティックな欲望を描く小説の系譜を辿るべく、結婚をめぐるディスコースと作者に潜むホモエロティックな欲望との格闘が、十九世紀を通じて存在したことを、四人の作家のテキストを扱い四つの章で論じた。

もう少し具体的に説明すると、第一章では、ヘンリー・ジェームズの『ポストニアンズ』(1886)を出発点とし、二人の女性のホモエロティックな欲望がテキストの中心に位置づけられることを論じた。第二章はハワード・オヴァリング・スタージスの『ティム』(1891)と『ベルチェンバー』(1904)を取りあげ、主人公がアセクシュアルであるために、当時の性をめぐるディスコースに絡め捕られていく様子を描く作品であると論じた。『ポストニアンズ』では女性同士の欲望の双方向性は描かれなかったが、『鳩の翼』(1902)は複雑な構造を持ち込むことで、その双方向性の可能性を隠蔽しつつ描き出すテキストであることを、スタージスのテキストとのインターテクスチュアルな関係を踏まえ、第三章で論じた。そして第四章ではヘンリー・ブレイク・フラーの『バートラム・コープの年』(1919)が、ジェームズの作品とのインターテクスチュアルな関係を基に男同士のホモエロティックな欲望を描く作品であることを論じた。

第五章ではホモエロティックな欲望を描く系譜を遡り、十八世紀末、チャールズ・ブロックデン・ブラウンの『オーモンド』(1799)に見られる隠蔽の構造を読み解いた。次に第六章では、婚姻制度への疑問とホモエロティックな欲望の結びつきを、アメリカン・ルネッサンス期のハーマン・メルヴィルの『タイピー』(1846)に見た。第七章ではホモセクシュアルという言葉が登場した直後の1870年に出版されたベイヤード・テイラーの『ジョゼフと友達』で、ホモエロティックな欲望を描く欲望が、時代の求める男性性に絡め捕られていく様子を論じた。第八章ではマーク・トウェインの『ジャンヌ・ダルクの個人的な回想』(1896)というテキストは、作者自身が自らのホモエロティックな欲望を葬り去る試みであることを示すと論じている。

大まかにいって十九世紀という時代はホモエロティックな欲望という、アイデンティティとしてのセクシュアリティが確立しようとする時代であった。その時代に、アメリカ人としてのアイデンティティと格闘する作家のテキストが持つ隠蔽と解放のドラマの、網羅的とは言えないが、少なくとも一端は、本論文により解明できたのではないかと考える。